

風姿花伝第二、
物^{もの}学^{まね}条々
老人

老人の物真^ま似^ね、此道の大事
なり。能^{くら}の位^い、即^やて、余^よ所^そ
目^めに現^{あら}るゝ事^{きは}なれば、これ
第一の大事なり。凡^おそ能^よを
良^よき程^{きは}究^きめたる為^し手^ても、老
たる姿^{すがた}得^えぬ人多^{おほ}し。たとへ
ば、賤^{いや}しき物^{もの}真^ま似^ねの、わざ

〔口訳〕 老人の物真似は、能楽道に於ては、
誠に重大事である。何故かといへば、
其の演者の芸位が、老人に扮すると、
直ちに見物の眼にあざやかに知れるも
のであるからである。一体に、能を相
当な程度にまで究めた役者でも、老人
の姿の不十分な者が多い。一例をとつ
て言へば、身分卑しい老人の物真似で、
伎^{わざ}の多い老体などは、大体に年寄りら
しくしとやかにふるまへばそれが良い
ので、さして大事なものではないが、
冠直衣とか、烏帽子狩衣といったやう
な、高貴な老体に扮する時には、その

物なんどの翁形おきながたは、大かた、
老々らうくとして閑雅しとやかなれば、さ
のみ大事なし。冠直衣なほし、烏え
帽子狩絹ぼしかり衣の老人の姿すがた、人体たい
気高けだかからでは賤せんなり。相応さうおう
すべからず。稽古こういりの劫入てて、
位上くらのぼらでは、似合にあふべから

人体が気高く見えなければ、如何にも卑ひしく見えて、一向に相応ふさはしくないものである。（宗節本では、「たとへば、木こり・塩汲みのわざなどをする老体を、相当に演ずると、すぐに上手な役者だと批判するが、それは間違つて居るのであつて、冠直衣や烏帽子狩衣などの高貴な老人に扮することは、道をきはめた上手でなくては似合ふべくもないものである。」となる）。かやうな高貴な老体は、長年の稽古の劫をつんで、芸位が上つたうへでなくては、到底やれるものではない。

ず。

又、花なくば、面白おもしろき事こと
あるまじ。若もし人の立たち振ふ
る舞まひ、老おいぬればとて、
腰膝こしひざを屈かゞめ、身を約つむれ
ば、花失うせて古様やうに見ゆる
なり。さる程に面白おもしろき所まれ稀

又老人の物真似に於て、花が欠けては全く面白い事はない。一体、老人の立ちふるまひに於て、如何に老人だからといつても、腰膝をかがめ、身体を縮めては、花といふものはなくなり、昔風な演出になつてしまふ。従つて面白い所は極めて乏しい。老人の物真似は、大体に於て、はしたなさを十分につつしんで、しとやかに立ちふるまふやうにすべきである。殊に老人の舞の風情は、無上の重大事である。「花は

なり。たゞ大方、如何にも
くそゞろにて、閑やかに
立ち振る舞ふべし。殊更老
人の舞い懸かり、無上の大
事なり。花は有りて、年寄
りと見ゆる公案、精しく習
ふべし。たゞ老木に花の咲

あつて、しかも年寄と見える公案」を
十分にくはしく習はねばならない。一
言以ていへば、正に「老木に花の咲い
たやうにする」にある。

かんが如し。

〔評〕 老人の物真似に於て特に強調せられて居る所は、芸位と花との二つで
ある。女体に於て強調された所が、扮態の要所であつたのと比べる時、
老人に於けるこの二つの注意は、心して味はふべき所だと思ふ。

芸の品位は、特に高貴な老体に於て要求せられる。芸位上達の士で
なくては演じ切れない所に、老人物のむづかしさがある。「神舞の閑全

なるよそほひは、老体の用風より出づ」とは、至花道書二曲三体の条に説く所である。現在に於ても、老松などの位は、名人でなくては、十分に出せるものでないといはれる。

次に「花」であるが、これも老体にはむづかしい。いやにくすんだ老人となつては、芸の面白さなどがあらはれさうもない。老人の花を如何に出すか。この解答は別紙口伝にゆづるが、とにかく老人心理の特有性にまで切り込んでゐる所は、老人の物真似が、初心未熟の者に不可能である半面をよく物語るものだと思ふ。後年の述作である二曲三体

絵図には老体について、「老体、閑心遠目。（次に老人裸形の図を示して）是は衣裳を整へて良かるべき其髓体也。この人体をよくよく心見^{しんけん}して立つるまふべし。花鏡云『先其物能成、後其態能似』是也。忘るべからず。」「老舞。此風ことに大事也。体は閑全にて遊風をなす所、老木に花の開んが如し。閑心を舞風に連続すべし。老尼、老女、同シ。神差^{かんさび}、閑全ノ用風ノ出所」と記されて居る。相互に参照して見るべきであらう。後者は、簡にして深、よく老体の骨髓を説き得てゐるではないか。